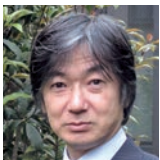


寄稿	
光易 恒 名誉会員が JpGU フェローとして顕彰	01
岡田武松先生を偲んで	02
情報	
The Effects of Climate Change on the World's Oceans シンポジウム報告	03
IOC/IODE SG-IQuOD 会合および第6回 XBT Science Team Workshop 報告	04
九州沖縄地区合同シンポジウム開催予告	05
学会記事	
春季大会報告	10
春季大会アンケート	13
学会賞・岡田賞・宇田賞 受賞候補者の推薦依頼	14
環境科学賞 受賞候補者の推薦依頼	15
通常総会議事録	16
連載	
アカデミアメランコリア (若手のコラム)	20



寄稿 ①

光易 恒 名誉会員が 2018 年度日本地球惑星科学連合フェローとして顕彰

東京大学 大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻 日比谷 紀之

2018年5月に千葉・幕張メッセで開催された日本地球惑星科学連合2018年大会において、本学会の光易 恒名誉会員が「海面波を中心とする海面の力学過程の研究および波浪予測における先駆的かつ顕著な貢献」により2018年度日本地球惑星科学連合フェローとして顕彰されました。

光易会員は、広島大学卒業後、運輸省港湾技術研究所に勤務し、壁面に作用する砕波の波力の研究で広島大学より博士号を授与され、テキサス A&M 大学海洋学科では客員研究員として海洋波の研究を進められました。その後、九州大学に移り、長年にわたり研究・教育に携わってこられました。

光易会員の研究分野は、海洋波を中心テーマとして、基礎から応用まで、海洋と大気の接する海面付近で起こる海象・気象全般に及んでいます。卓越した実験的研究により、海洋物理学および海洋工学の分野で多くの優れた業績をあげてこられました。最も顕著な業績としては、(1)風波の実態の解明に関する研究、(2)海洋波の力学過程に関する研究、(3)大気から海洋への運動量輸送に関する研究の3項目が挙げられます。独創性に富む精緻な実験方式を用いた研究により、これらの実態と力学過程を解明し、世界の海洋波研究を常にリードしてこられました。このような功績により、1988年にスヴェルドラップ・ゴールドメダル賞を受賞され、その後1993年には本学会の学会賞、2007年には宇田賞を受賞されております。

また、光易会員は、学術審議会専門委員(文部科学省)、海洋開発審議会専門委員(同)、日本学術会議研究連絡委員会委員などの要職を務められ、科学行政に大きく貢献されました。本学会においても、1970年以来長年にわたって評議員を務められ、沿岸海洋研究

部会評議員や、賞選考委員では委員長を務められる等、多大な貢献をされてきました。2005年にはその貢献をたたえ、本学会名誉会員の称号を授与されております。

今回の光易会員の日本地球惑星科学連合フェローとしての顕彰は、以上述べてきたような地球惑星科学分野の学術の進展に関する顕著な貢献が高く評価されたものです。表彰式は5月22日(火)の夜、東京ベイ幕張ホールにおいて行われ、顕彰の際には海洋学会員のみならず参加者全員より盛大な拍手が送られました。

今回の顕彰に際し、光易会員に心からお祝いを申し上げるとともに、今後も本学会および大気海洋分野での益々のご活躍を心より祈念致します。



表彰式での光易名誉会員(右)と日比谷会長(左)

岡田 武松先生を偲んで

名誉会員 宇野木 早苗

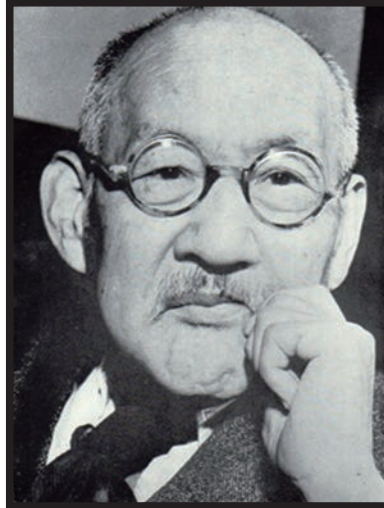


サッカーのワールドカップ日本・ポーランド戦で日本中が沸いた、去る6月28日(木)のNHKBSプレミアムの20時からの1時間番組「昭和の選択」において「消えた天気予報!! 軍 VS 気象台、戦争と天気との深い関係」が放映され、当時の中央気象台長・岡田 武松博士が戦時中に軍に対して取られた行動が紹介された。岡田 武松博士が日本海洋学会の初代会長(1941-1947)であること、および若き俊秀の海洋研究者に贈られる日本海洋学会岡田賞が、その人を記念して名前が冠せられたことを知っている人も、同博士がどのような方で、何をなされたかを知っておられる会員は非常に少ないと思われる。

これも理由がないことではない。博士が1956年に83歳で亡くなられてから早や62年になる。また博士の海洋分野における偉大な業績は、我が国の近代的海洋研究の発展に欠かすことのできない組織・施設という研究環境の整備と、研究者の育成という基礎的分野における貢献であった。そうして本来気象学の専門家である博士は、その分野では優れた論文や学術書を多数書かれているが、海洋に関しては研究の指導をされても、自身では格別の論文や成書を残されていない。

このようなわけでやむを得ない点がある。しかし戦後間もなく博士の晩年期に、気象台の学校で毎週親しく講義を受け、その豊かな学識と人間的魅力に強く心を惹かれた筆者は、海の研究、4巻2号、127-132頁、1995年に「岡田武松先生のこと」という小文を書いて、若い学会員に先生を紹介したことがある。興味ある人はこれを見ていただきたい。なお先生の全体像は、須田 瀧雄博士の労作「岡田武松伝」、岩波書店、1968年刊、全612頁に余すところなく伝えられている。

岡田台長は、気象事業は防災や産業の発展に貢献し、国民の日常生活と福祉に寄与することが最大の目的であると考えられ、そのために遅れて出発した日本の気象事業の近代化と効率化に心血を注がれた。上記のNHKの番組の内容は、これをないがしろにしようとする軍の振る舞いに反対する先生の行動を伝えるものであった。この前の戦争の間ずっと天気予報の公表が禁止されていたことから理解できるように、気象情報はすぐれて軍の機密に属していた。中国大陸で侵略戦争を次々拡大してきた陸軍は、これまで中央気象台に



対して様々な横車を押してきたが、気象情報を独占すべく、ついに中央気象台を文部省(当時)から陸軍省に移したいと申し入れて来た。

これに対して岡田台長らは強く反対したが、軍の強硬な申し入れに反論する岡田台長の心痛は見るに堪えなかったといわれる。この暴論は、さすがに気象台のみならず、各方面から反対があつて陽の目を見ることはなかった。だが、番組にも紹介してあつたが、軍の案を通すには岡田を殺すしかないといった軍人の言葉も伝えられている。当時、気象台にいろいろな圧力が加わり、時に軍人や右翼の

動きに先生に身の危険を感じさせられることもあつたが、先生は毅然として対処し、動ずることは無かつたといわれる。なお敗戦直後、幸いにも民政のために残された気象台がラヂオから伝える天気予報を聞いて、初めて平和の訪れを実感したという人は少なくない。

ちなみに岡田先生は第一級の天気予報者であつた。日本の運命を決した1905年の日露戦争日本海海戦のとき予報担当者として、世に膾炙した「天気晴朗なれど浪高かるべし」の予報文を作成し、連合艦隊の作戦行動に大きく寄与したことは、知る人ぞ知るエピソードである。長距離の航海に疲労して戦闘能力が落ちたと考えられるバルチック艦隊を、晴天の荒海で迎え撃つ我が連合艦隊のとるべき作戦に、この予報が大きく役立ったと伝えられる。

先生は気象のみならず、社会生活に深く関係する海洋、地震などの地球物理現象の観測と研究にも力を注がれた。海洋に関しては神戸に海洋気象台を創設され、また凌風丸、春風丸などの大小5隻の観測艦隊を建造されて、日本周辺の花と沿岸の観測と研究を進められた。その際、海洋物理のみならず、海洋生物、海洋化学の研究の発展と研究者の育成にも努力をされた。その結果、海洋物理では須田 暁次、日高 孝次、中野 猿人、海洋化学では三宅 泰雄、海洋生物では松平 康夫、その他の諸先生が輩出した。

また日本海洋学会の創設に尽力され、初代海洋学会長に押しされた。なお初代から8代までの海洋学会長のうち、3代の速水 頌一郎先生を除いて他は全て気象台出身者であることから、先生が気象台に播かれた種が花を開き、実を結んだ結果とみなされる。先生は気象台退官後、学術研究会議議長を務められ、1949年には文化勲章を受章された。



情報① シンポジウム報告

4th International Symposium “The Effects of Climate Change on the World's Oceans” 報告

東京大学 大気海洋研究所 伊藤 進一

2018年6月2-8日まで Washington Hilton(ワシントンD.C.)にて、ICES, PICES, IOC, FAOの主催のもと、4th International Symposium “The Effects of Climate Change on the World's Oceans”が開催された。今回、FAOからのManuel Barange氏、IOCからのVeronique Garcon氏、ICESからのJason Link氏とともにPICESを代表してシンポジウムコンビーナを務めたので、ここに報告する。

本シンポジウムは、スペイン(2008年)、韓国(2012年)、ブラジル(2015年)に次いで開催され、第4回となった。世界51カ国から669名の参加者があり、前回の倍以上の参加者という大盛況ぶりであった。その大きな原動力となったのは、作成サイクルに入ったIntergovernmental Panel on Climate Change (IPCC)の**Sixth Assessment Report (AR6)**、そして執筆作業中の**Special Report on the Ocean and Cryosphere in a Changing Climate (SROCC)**であろう。実は、第1回と第2回の間には、AR5の作成中である2010年にInternational Symposium “Climate Change Effects on Fish and Fisheries”が仙台において開催されており、その際にもシンポジウムコンビーナを務めたが、その時と同じ熱気を今回も実感した。本シンポジウムでは、18件のセッションと11件のワークショップが開催されたが、セッション応募が93件(5.2倍)、ワークショップ応募が20件(1.8倍)あったことからその注目度の高さがわかると思う。結果的に、93件のセッション応募から18件に絞り込み、マーキングする作業が発生したため、Science Steering Committee(日本からは野中正見会員と西海区水産研究所の高橋素光氏、委員長はAnne Hollowed氏)はかなりの苦勞をすることとなった。また、日本からもたくさんのセッション提案をして頂いたが、なかなか希望通りにならない形となり、多くのご迷惑をおかけすることとなってしまった。しかし、これだけ高い競争率の中、野中正見会員、藤井賢彦会員、小埜恒夫会員、望月崇会員、綿貫豊氏がセッション・ワークショップのコンビーナとして選出されたのは大変喜ばしいことである。

2日間のワークショップのあと、シンポジウムの開会式は、ホストであるNOAAのトップとなるAssistant Secretary of Commerce for Oceans and Atmosphere and Acting Under Secretary of Commerce for Oceans and AtmosphereのTimothy Gallaudet氏の基調講演から始まった。実は、本シンポジウムの開催は、2015年のブラジル開催後すぐにワシントンD.C.での開催が決定したが、トランプ政権の樹立によって、現地実行委員会の苦心は並大抵のものではなかった。ホスト側の基調講演も難しい部分があると予想していたが、Gallaudet氏は、合衆国政府の方針に反することがないように細心の注意を払いつつ、海洋学の重要性、国際協力の重要性を強く訴え、非の打ち所がない講演を行った。もう1人の基調講演者は、なんとJacques-Yves Cousteau氏のお孫さんのPhilippe Cousteau氏であった。Philippe Cousteau氏は、EarthEcho Internationalという持続可能な地球を作るための環境リーダー育成を目指した団体を主宰しているが、EarthEcho International若手育成プログラムのメンバーであり大学を卒業したばかりのOlivia Blondheim氏と2人で基調講演をするという斬新なスタイルをとった。映像制作者でもあり、またその映像の中で俳優も務める

Cousteau氏は、まるでラジオのディスクジョッキーのようなテンポで語り、海氷の上にいるシロクマの写真からは地球温暖化のことをイメージするのに、なぜ赤ん坊の写真からは人々は地球温暖化をイメージできないのかと訴えた。地球温暖化の緊急性を訴えるには、①聴衆を知ること、②エンターテインメントの要素を取り入れて訴えること、③悲観的にはならず楽観的に展望を示すこと、が重要であると唱えた。一般的な科学シンポジウムの基調講演とはかけ離れたCousteau氏の講演は、賛否両論を巻き起こしたが、このシンポジウムを通して参加者は社会に科学的知見を伝え持続可能な社会目標(SDGs)を達成することが科学者にも求められていることを痛感することになるわけで、その幕開けとしては相応しいインパクトのある基調講演となった。

シンポジウム2日目以降は、数人の全体講演が企画され、そのあと並列セッションに分かれるというスタイルが取られた。全体講演者は、地理的バランス、ジェンダーバランスを熟考して選出したが、Sarah Cooley氏、Alistair Hobday氏、Lisa Goddard氏、Andreas Oschlies氏、Merle Sowman氏、Gretta Pecl氏をはじめ、素晴らしい講演が続いた。日本からも原田尚美会員、Severin G. Salmo III氏が全体講演を行い、シンポジウムを盛り上げた。また、全体講演に先立って、前日の会議の様子を漫画で総括するという試みもなされた(<https://www.flickr.com/photos/pices/sets/72157669719136128>)。グラフィックデザイナーのBas Kohler氏に依頼し、各会場で発表を聞き、印象に残った事柄を漫画にし、翌日の朝に発表してもらった。4名のシンポジウムコンビーナの間でも、果たしてこの試みが上手くいくのか議論を重ねたが、結果的に予想以上に効果的であった。参加者全員が、前日の議論のポイントを共有し、その日の全体講演、並列セッションに参加できたと思う。絵の力を改めて知ることとなった。会期中に参加者が情報を共有するツールとして、Twitterも用意され(<https://twitter.com/eccwo>)、346名のフォロワーが1,465件のつぶやきをしたが、Kohler氏の漫画へのツイートは最も多かった。

そのほか、会期中には様々なイベントも催された。サイエンスコミュニケーションを推進する団体COMPASS (Communication Partnership for Science and the Sea)が、開会式前夜、2日目のTown Hall、2日目の夜とイベントを開催し、限られた時間の中で科学的知見を伝える方法について実践トレーニングをしてくれた。著名なサイエンスジャーナリストをメンターとして実施したトレーニングは効果抜群で、初日に開催されたパネルディスカッションでは、前夜にトレーニングされたパネラーたちが短い言葉で的確な発言を連発した。2日目の夜のCOMPASSイベントは、檀上にあがってトレーニングを受けたい若手研究者が大勢集まり、大盛況となった。話下手の私も、ジャーナリストの思考回路と研究者の思考回路の差をレクチャーされ、とても勉強になった。

Town Hallでは、Women's Aquatic Network (WAN)による若手研究者のキャリア形成に関する集会も行われるとともに、前述のIPCC AR6およびSROCCの作成手順についての集会が開催され、IPCC副議長のKo Barret氏、IPCC WGIIの共同議長であるHans Poertner氏、IPCC WGII TSU Head of ScienceのElvira Poloczanska

氏、William Cheung 氏、Anne Hollowed 氏とともに、私もパネルディスカッションに加わった。時間は限られていたため、多くの議論はできなかったが、若手研究者からどうすれば IPCC の評価報告書に貢献できるのかといった積極的な質問を受け、SROCC や AR6 への関心の高さを垣間みることができた。

シンポジウム最終日は、World Oceans Day にあたっており、参加者全員で "Oceans matter" を三連呼したが、このシンポジウムを通じて、①海洋の現象は海洋だけにとどまらず地球システムそして人間生活に大きな影響を与えること、②地球温暖化による海洋の変化が目に見える形で様々な場所で起きていること、③そのため多くの利害が発生しつつあること、を改めて強く認識することができた。そして、④地球温暖化の影響による変化とリスクの理解が進みつつあること、⑤社会を含めて適応策を考える行動が始まっていること、を実感することができた。多くの発表者が SDGs のスライドを示していたが、海洋は SDG14 「海の豊かさを守ろう」だけではなく、17 個のすべての達成目標に関連している。"Oceans matter" は人類全体、地球全体の問題であり、海洋学者はそのことを肝に銘じて研究を進めるべき時代を迎えている。本シンポジウムでも、社会科学と自然科学が既に垣根をなくしており、一体となって持続可能な社会構築に向けて進んでいる例が数多く示された。実は、セッ

ションの選定にあたって、シンポジウムコンビーナとして純粋な自然科学を中心とするセッションの確保を強く主張したのだが、世界の潮流は社会科学と自然科学の協創に向け急速に進んでおり、私の目からはやや社会科学に偏りがあるように見えたセッションの構成が、的を得ているものであったことを認識した。その意味で、日本が少し遅れを取りつつあることも痛感することとなった。

シンポジウムコンビーナの 1 人である Manuel Barange 氏がパネルディスカッションの際に、"Inaction is maladaptation" と述べたが、まさに今、海洋学者は行動しなければいけない時を迎えている。Alistair Hobday 氏の "Applications and discussions with managers first, science papers second" という言葉、それは既に大成した人にしか言えないだろうと思ったが、もう一度その言葉をよく考えてみる必要があるのだろう。今回、日本からは、Invited Speaker の Jorge García Molinos 氏、PICES Science Board 議長の齊藤 宏明会員をはじめ、18 名が参加したが、もっと多くの研究者に世界の潮流を感じて欲しいと思った。里海概念を持つ日本から、独自の提案をし、行動に移すことができると思う。日本海洋学会の皆さん、2021-2030 年の国連 "Decade of Ocean Science for Sustainable Development" に向け、"It's time for Action!" (Kohler 氏の漫画の最後の一コマより) です。



全体講演を行う原田 尚美会員



COMPASS の Nancy Baron 氏がモデレータを務めた科学ジャーナリストと科学者のパネルディスカッション



情報 ②

IOC/IODE SG-IQuOD 2018 Meeting and the 6th XBT Science Team Workshop 参加報告

一般財団法人日本水路協会 海洋情報研究センター 鈴木 亨

2018 年 4 月 16 日-18 日午前に SG-IQuOD (Steering Group for the International Quality-controlled Ocean Database) が、引き続き 18 日午後-20 日午前に第 6 回 XBT サイエンスチーム・ワークショップがベルギー・オステンデの UNESCO/IOC Project Office for IODE で開催された。両会合とも前回は 2016 年 10 月に(独)環境再生保全機構の環境研究総合推進費(2-1506)の支援により東京で開催されている(ニュースレター第 6 巻第 3 号参照)。XBT ワークショップに関してはニュースレター第 4 巻第 4 号、同第 1 巻第 3 号、海の研究第 19 巻第 6 号に過去の参加報告が掲載されているので併せてご参照いただきたい。

IQuOD 会合としては 5 回目となる SG-IQuOD には 10 カ国から 32 名が参加し、うち 4 名は WebEx での参加であった。IQuOD の 5 つのタスクチーム(以降 TT)からの進捗報告があり、i-Meta

(Intelligent Metadata) TT からはプローブタイプが不明なプロファイルに対して、Palmer *et al.* (2018)のアルゴリズムに従って推定したプローブタイプを IQuOD v0.1 に付与したこと、Uncertainty TT からは IQuOD v0.1 向けに測器毎に深度・水温・一部の塩分に関する uncertainty assignments を整備したことがそれぞれ報告された。Format TT からは Argo データフォーマットを基に開発を進めていることが報告され、ここではその採択理由や netCDF CF conventions との互換性について質疑応答がなされた。GDAC (Global Data Assembly Center) TT からは重複チェックと上述した i-Meta, uncertainty の各 TT による成果が反映された IQuOD v0.1 が NCEI/NOAA website の WODselect から今年中にリリースされること、doi:10.7289/V51R6NSF が付与され、最終的に netCDF, native ASCII, spread sheet (csv)の 3 種類のフォーマットから選択できるこ

とが報告され、XBT Science Teamからのフィードバックや品質フラグ、WOD (World Ocean Database) との違いに関する質疑応答がなされた。Auto QC (自動品質管理) TTからは、Argo, CSIRO, CoTeDe (github.com/castelao/CoTeDe 参照), MetOffice, ICDC (独ハンブルグ大 Integrated Climate Data Center)、WODから採用した計50種類のQCを実装して github.com/IQuOD で公開していることが報告され、Expert QC (専門家による品質管理) TTからは machine learning を用いたQCが紹介された。これらに加えて Ocean Heat Contents and Ocean Forecasting (Data Assimilation) System タスクチーム (Performance Metrics TT) の設置が提案された。IQuODが第23回 IODE 総会 (2015年3月ベルギー・ブルージュ) において IOC/ IODE プロジェクトとして承認されたことに伴い、第24回総会 (2017年3月マレーシア・クアラルンプール) において報告された内容が紹介され、WOD, GTSP (Global Temperature and Salinity Profile Project), GODAR (Global Oceanographic Data Archeology and Rescue) など既存 IODE プロジェクトとも密接に関係していることから、それらとの連携強化が再確認された。また IQuOD は2016年から SCOR WG148 としても活動しており、SCOR Executive Committee Meeting (2017年9月南アフリカ・ケープタウン) において ToR (Terms of Reference) 1: i-Meta, 5: Uncertainty, 6: GDAC が完了し、TOR 2: Auto QC, 3: Expert QC が進行中であると報告したことが紹介され、SG-IQuOD においても次に注力すべきはこれら進行中の2つのQCであることが確認された。これに関連して real-time と delayed mode でのQCの相違とフラグ付与に関して活発な意見交換が行われ、重複問題に関しては中国が高い関心を示したようであった。今次会合ではメキシコが初参加であったが、一層のコミュニティー拡大を図るために、IOCが推進する OTGA (Ocean Teacher Global Academy) を活用した能力開発・技術研修の開設を検討することとなり、南アフリカやオーストラリアが開催候補地として挙げられた。AGU 2018 Fall Meeting が Washington D.C. で開催されることに伴い、NCEI/NOAA から IQuOD 関連のセッション提案が発議されたが、今次会合期間中が締め切りであったため、この件は発議者に一任された。最後に SG-IQuOD および TT, SCOR WG148 のメンバー構成の確認、website (www.iquod.org) の維持更新、Github や Slack の活用などについて総合討論が行われ、活動資金に関連して提案された Australian Research Council への申請については提案者に一任された。次回会合の主催には中国が名乗りを上げたため、2019年は北京もしくは青島での開催が見込まれる。会合の最終報告書は IOC report として刊行される予定で

あるが、議事次第および報告資料の一部は www.iode.org から参照できる。

引き続き開催された XBT サイエンスチーム・ワークショップには9カ国から19名が参加し、さらに4名は WebEx で参加した。本ワークショップの主題は XBT 観測ネットワークの実施および維持・強化の進展に関する意見交換ならびに討論であるが、さらに4つテーマ：海洋貯熱量、熱輸送、XBT データ改善・バイアス補正、境界流について、それぞれ研究発表および質疑応答も行われた。筆者は XBT データ改善のセッションで上述の推進費で実施したストリップチャートのデジタルトレースとその補正について紹介したが、熱輸送セッションでは地中海においてチャートレコーダーとデジタルコンバーターの両方を用いた同時観測を実施したところプロファイルに著しい違いは見られなかったことが紹介されていた。これらテーマ・セッションに引き続き、前回会合で策定された活動計画の進捗状況が確認され、12項目にわたる次期活動計画に更新された。うち1つはここで紹介したデータの公開であり、IQuODへの寄与にもなるため急ぎ最終検査中である(注：www.xbt-japan.org から公開予定)。本ワークショップの最終報告書は IOC Workshop Report No.283 として刊行済みであるので詳細はそちらをご覧ください。

References

Palmer, M.D., T. Boyer, R. Cowley, S. Kizu, F. Reseghetti, T. Suzuki, and A. Thresher (2018): An algorithm for classifying unknown Expendable Bathothermograph (XBT) instruments based on existing metadata. *J. Atmos. Oceanic Technol.*, 35, 429-440, <https://doi.org/10.1175/JTECH-D-17-0129.1>.



SG-IQuOD 参加者



情報③ 2018年度九州沖縄地区合同シンポジウム(開催予告)

「日本海研究の現状と今後について」

水産大学校 海洋生産管理学科 柏野 祐二

共 催：日本海洋学会西南支部、一般社団法人水産海洋学会
 日 時：2018年12月10日(月) 10:30-17:30(予定)
 場 所：水産大学校
 コンピーナー：柏野 祐二(水大校)、磯辺 篤彦(九大)、
 渡邊 俊輝(山口水研センター)

基調講演：1-2題、40-50分程度
 一般講演：8-10題、1題15-20分程度(講演者数により変更
 する場合があります)
 参加登録料：無料

開催趣旨: 日本海はその北部で深層水(日本海固有水)が形成されていることから、海洋大循環の縮図として「ミニ大洋」と称されているが、そのサイズが全世界の海洋よりはるかに小さいことから、地球温暖化の影響がその循環に現れやすいと考えられている。実際、その日本海の深層において近年水温上昇と低酸化が進んでいる、すなわち日本海の熱塩循環に異変が生じていることが、東京大学や気象庁他の観測により示されている。

また、日本海では冬においてユーラシア大陸からの季節風に対馬暖流から大量の熱・水蒸気が供給されている。特に2018年冬は北陸で大雪となったが、その原因には日本海上で季節風が収束する日本海寒帯気団収束帯(JPCZ)が北陸に停滞したことが示唆されている。

日本海の入口になる対馬海峡から西部山陰に至る海域は、マアジやマサバといった浮魚類の代表的な漁場であり、大和堆もスルメイカなどの好漁場であることが古くから知られており、日本海は水産業としてのポテンシャルが高い。また近年、クロマグロの産卵場が隠岐諸島から能登半島で確認され、日本の漁業にとっても重要な海域となっている。

以上に記した通り、日本海は我が国の気候や水産にとって重要な位置付けを占めている。このため日本海の研究は古くから行われており、特に1990年代以降にCREAMS(Circulation Research of East Asian Marginal Seas)などの研究が行われたことにより、多くのことがわかってきた。しかしながら、近年さまざまな問題により観測が(特に北部で)難しくなりつつあり、今後日本海研究を進めるうえで障害になっている。

このような背景を鑑みて、本シンポジウムでは、現在行われてい

る日本海研究を総括し、そして今後どのような研究を行うべきかを議論することを目的とする。ただし、日本海に限定したテーマのみではなく、日本海に影響を及ぼすような海域・現象についても広くテーマを募集することで、より広い観点から日本海研究について議論できることを期待している。

●一般講演の募集要領

◇締切: 2018年9月21日(金) 必着

◇必要事項: 講演題目、共著者を含む講演者所属・氏名、E-mail アドレス

・一般講演の採否結果は、9月末までに通知します。

◇申込先: 〒759-6595 下関市永田本町2-7-1 水産大学校

海洋生産管理学科 柏野 祐二

電話: 083-227-3883、FAX: 083-286-7432、

E-mail: kashinoy@fish-u.ac.jp

●講演要旨

◇締切: 2018年11月16日(金) 必着(送付先は講演申込先と同じ)

◇書式: 日本海洋学会の研究発表大会時の講演要旨に準ずる。

・ワードプロセッサを用い、A4 版用紙2枚以内。

・マージンは、上下に30mm、左右に20mmで設定。

・研究題目、発表者、所属、キーワードを上段(30mm程度)に記入。

・本文は2段組が望ましい。



情報④

Journal of Oceanography 目次

Journal of Oceanography

Volume 74 · Number 3 · June 2018

ORIGINAL ARTICLES

Relations between salinity in the northwestern Bering Sea, the Bering Strait throughflow and sea surface height in the Arctic Ocean

Y. Kawai · S. Osafune · S. Masuda · Y. Komuro 239

Effects of mesoscale eddies on the variation of water exchange through the Kerama Gap

W.-Z. Zhou · F. Yu · F. Nan · Y.-S. Liu 263

Variability in the production of organic ligands, by *Synechococcus* PCC 7002, under different iron scenarios

G. Samperio-Ramos · J.M. Santana-Casiano
M. González-Dávila 277

High-resolution surface salinity maps in coastal oceans based on geostationary ocean color images: quantitative analysis of river plume dynamics

S. Nakada · S. Kobayashi · M. Hayashi · J. Ishizaka
S. Akiyama · M. Fuchi · M. Nakajima 287

Spatial distribution of dissolved methane and its source in the western Arctic Ocean

K. Kudo · K. Yamada · S. Toyoda · N. Yoshida
D. Sasano · N. Kosugi · M. Ishii · H. Yoshikawa
A. Murata · H. Uchida · S. Nishino 305

Effect of bacterial activity on nutrient regeneration and release from bottom sediments

J. Koomklang · H. Yamaguchi · K. Ichimi · K. Tada 319

Influence of western boundary reflection on seasonal circulation in the equatorial Indian Ocean

J. Wang · D. Yuan · X. Zhao 327



情報 ⑤

Oceanography in Japan「海の研究」目次

27 巻 4 号 (2018 年 7 月)

[原著論文]

宗谷暖流沖合域の冷水帯を伴った日周期渦流の観測とモデル実験

飯田 博之・磯田 豊・小林 直人・堀尾 一樹 155-174



情報 ⑥

「海洋学関連行事カレンダー」

JOSNL 編集委員 根田 昌典

SPARC General Assembly 2018

日程：2018 年 10 月 1 日(月)–5 日(金)

会場：みやこメッセ(京都市左京区)

ウェブサイト：http://www-mete.kugi.kyoto-u.ac.jp/SPARC_GA2018/index.html

6th Argo Science Workshop

日程：2018 年 10 月 22 日(月)–24 日(水)

会場：一ツ橋ホール(東京都千代田区)

ウェブサイト：<http://www.jamstec.go.jp/e/pr/event/asw6/index.html>

17th World Lake Conference

日程：2018 年 10 月 15 日(月)–19 日(金)

会場：つくば国際会議場 他(茨城県つくば市)

ウェブサイト：<http://www.wlc17ibaraki.jp/en/>

PIRATA Prediction and Research Moored Array in the Tropical Atlantic

日程：2018 年 10 月 22 日(月)–26 日(金)

会場：Marseille, France

ウェブサイト：<http://www.brest.ird.fr/pirata/>

Workshop on Non-Hydrostatic Ocean Modeling

日程：2018 年 10 月 15 日(月)–17 日(水)

会場：IUEM, Brest, France

ウェブサイト：<https://nhom-brest.sciencesconf.org/>

PICES 2018 Annual Meeting

日程：2018 年 10 月 25 日(水)–11 月 4 日(日)

会場：ワークピア横浜(神奈川県横浜市)

ウェブサイト：<https://meetings.pices.int/meetings/annual/2018/pices/scope>

The 2nd WESTPAC Workshop on Microplastic Research and Monitoring

日程：2018 年 10 月 15 日(月)–17 日(水)

会場：Shanghai, China

ウェブサイト：<http://iocwestpac.org/calendar/882.html>

日本気象学会 2018 年度 秋季大会

日程：2018 年 10 月 29 日(月)–11 月 1 日(水)

会場：仙台国際センター(仙台市青葉区)

ウェブサイト：<http://www.metsoc.jp/meetings/2018a>

IV International Conference on El Niño Southern Oscillation: ENSO in a Warmer Climate

日程：2018 年 10 月 16 日(火)–18 日(木)

会場：Escuela Superior Politecnica del Litoral (Guayaquil, Ecuador)

ウェブサイト：<http://www.ensoconference2018.org/>

The 12th International Conference on the Environmental Management of the Enclosed Coastal Seas (EMECS 12)

日程：2018 年 11 月 4 日(日)–8 日(木)

会場：Jomtien Palm Beach hotel, Pattaya, Thailand

ウェブサイト：<https://www.emecs12.com/>

Ocean Salinity Science Conference 2018

日程：2018年11月6日(火)–9日(金)
会場：Sorbonne University (Paris, France)
ウェブサイト：<https://nikal.eventsair.com/QuickEventWebsitePortal/2018-ocean-salinity-science-conference/esa-2018>

The Earth's Energy Imbalance and Its Implications (EEI)

日程：2018年11月13日(火)–16日(金)
会場：Toulouse, France
ウェブサイト：<http://www.clivar.org/events/2018-wcrp-workshop-earth%E2%80%99s-energy-imbalance-and-its-implications-eei>

2018年度水産海洋学会研究発表大会

日程：2018年11月15日(火)–18日(木)
会場：東京大学大気海洋研究所(千葉県柏市)
ウェブサイト：<http://lmr.aori.u-tokyo.ac.jp/jsfo2018/>

日本リモートセンシング学会 第65回学術講演会

日程：2018年11月27日(火)–28日(水)
会場：サンポートホール高松(香川県高松市)
ウェブサイト：http://www.rssj.or.jp/act/conference/65th_autumn/

第9回極域科学シンポジウム

日程：2018年12月4日(火)–7日(金)
会場：国立極地研究所、統計数理研究所および国立国語研究所
ウェブサイト：<http://www.nipr.ac.jp/symposium2018/>

AGU 2018 Fall Meeting

日程：2018年12月10日(月)–14日(金)
会場：Washington, D.C., USA
ウェブサイト：<https://fallmeeting.agu.org/2018/>

99th AMS Annual Meeting “Understanding and Building Resilience to Extreme Events by Being Interdisciplinary, International, and Inclusive (III)”

日程：2019年1月6日(日)–10日(木)
会場：Phoenix Convention Center (Phoenix, USA)
ウェブサイト：<https://annual.ametsoc.org/2019/>

Environmental Fluid Dynamics: Confronting Grand Challenges

日程：2019年1月20日(日)–25日(金)
会場：Les Houches (France),
ウェブサイト：<http://perso.ens-lyon.fr/thierry.dauxois/GrandChallenges/LesHouchesConference2019.html>

7th International Symposium on Data Assimilation (ISDA 2019)

日程：2019年1月21日(月)–24日(木)
会場：兵庫県神戸市

第34回北方圏国際シンポジウム「オホーツク海と流氷」

日程：2019年2月17日(日)–20日(水)
会場：紋別市民会館(開会式)(北海道紋別市)
ウェブサイト：<http://www.o-tower.co.jp/okhsympo/subject/1stCircr.html>

平成31年度日本水産学会春季大会

日程：2019年3月26日(火)–30日(土)
会場：東京海洋大学 品川キャンパス(東京都港区)

EGU General Assembly 2019

日程：2019年4月7日(日)–12日(金)
会場：Vienna, Austria
ウェブサイト：<https://www.egu2019.eu>

SOLAS Open Science Conference 2019

日程：2019年4月21日(日)–25日(木)
会場：北海道大学学術交流会館(北海道札幌市)
ウェブサイト：<https://www.confmanager.com/main.cfm?cid=2778>

JPGU2019

日程：2019年5月26日(日)–30日(木)
会場：幕張メッセ(千葉県千葉市)

気象学会春季大会

日程：2019年5月15日(火)–18日(金)
会場：国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区)

2nd IMBeR Open Science Conference

日程：2019年6月17日(月)–21日(金)
会場：Le Quartz Congress Centre (Brest, France)
ウェブサイト：<http://www.imber.info/en/events/osc-imber-open-science-conference/osc-2019/2019-imber-open-science-conference>

27th IUGG General Assembly

日程：2019年7月8日(月)–18日(木)
会場：Palais des Congrès in Montréal (Québec, Canada)
ウェブサイト：<http://iugg2019montreal.com>

OceanObs'19: An Ocean of Opportunity

日程：2019年9月16日(月)–20日(金)
会場：Hawaii Convention Center (Honolulu, USA)
ウェブサイト：<http://www.oceanobs19.net>

水をみつめて—— T.S.K since 1928

当社は、水を測る機器の専門メーカーとして、この道一筋に今日に至っています。

現在では、過酷な海洋環境に耐え得るノウハウが、ダム、河川に至る水質測定器の開発に寄与しています。



卓上型塩分計

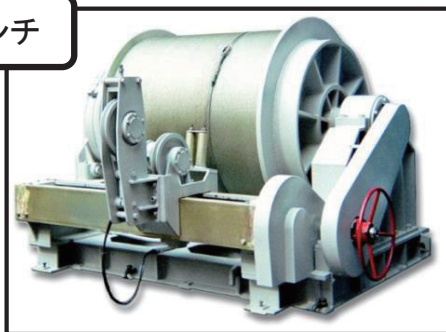
海洋自動観測システム



水質総合監視装置



海洋観測用ウインチ



eXpendable 水温／塩分計



T.S.K

株式会社 鶴見精機

<http://www.tsk-jp.com/>
sales@tsk-jp.com

- 本社・横浜工場
- 白河工場
- TSK America, Inc.
- TSK Liaison Office in India



書評

『里海学のすすめ 人と海との新たな関わり』

鹿熊 信一郎・柳 哲雄・佐藤 哲 編

勉強出版 2018年3月刊行

A5判 364頁 本体4,200円 ISBN-978-4-585-26002-8

評者：広島大学 名誉教授 里海づくり研究会議 松田 治

本書は、記念すべき里海生誕 20 周年の 2018 年 3 月に、正に時宜を得て出版された。里海という概念は、1998 年に本書の編者の一人でもある柳 哲雄九州大学教授(当時)により初めて公式に提唱された。従って、今回の出版は、里海のこの 20 年を振り返り、将来を展望するのに大変ふさわしい。

分野横断的で多彩な内外の 15 名の著者による本書は、序章「里海とはなにか」と終章「里海がひらく未来」の間の 4 部構成である。第 1 部「里海概念の意義と里海創生活動の広がり」では里海の考え方と歴史が紐解かれ、第 2 部「直接人の手をかけて生態系機能を高める」、第 3 部「海の資源を豊かにする」と第 4 部「人と海のつながりをつむぐ」は、内外の里海活動の実践事例とその分析や解説で構成されている。インドネシア、フィジーなど海外の Satoumi 活動事例が豊富で、里海型 MPA など里海の国際展開の現状を知る上でも非常に役に立つ。

本書は、総合地球環境科学研究所において 2012 年から 5 年間実施された「地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可

能な管理」プロジェクトの研究成果の一部でもある。従って、論拠や参考文献も豊富で、「新たなコモンズ論」や「持続的な総合的沿岸域管理論」として読んでも大変に興味深い。おりしも、2018 年 5 月には第 3 次海洋基本計画が閣議決定され、これからの日本の「海洋政策のあり方」に、「持続可能な開発目標(SDGs)等国际枠組の重視」と、「高い生産性と生物多様性が維持されている『里海』の経験を活かす沿岸域の総合的管理」が盛り込まれた。

社会と科学を統合して地域の問題解決をめざす「トランスディシプリナリーサイエンスとしての里海学」が提案されており、例えば、レジデント型研究者や双方向トランスレーターの有用性も説かれている。本書が多くの関係者に読まれて里海学が更に進化し、内外の実践活動としての里海づくりが深化することを期待したい。本書からのファイナル・メッセージは、「人を排除する原生自然保護を超え、人が海と密接に関わる里海をつくるのが、日本・世界の沿岸環境を保全し、水産資源を守るうえで効果的」である。このことを一人でも多くの人に知ってもらい、自分自身の「人と海との新たな関わり」の第一歩を踏み出していただきたい。



学会記事 ①

2018 年度 日本海洋学会春季大会 報告

大会実行委員会 委員長 川合 義美

大会日程：2018 年 5 月 20 日(日)–5 月 24 日(木)
大会会場：幕張メッセ国際会議場・東京ベイ幕張ホール
大会実行委員会 委員長：川合 義美

(国立研究開発法人 海洋研究開発機構)

1. 春季大会と実行委員会の概要

2018 年度日本海洋学会春季大会は、昨年に続いて、日本地球惑星科学連合(JpGU)の大会に合流する形で行われました。日本海洋学会(以降、海洋学会)の 2018 年度春季大会実行委員会は、JpGU 担当幹事、集会担当幹事、及び研究発表担当幹事を含む幹事 5 名で構成されました。

2. セッション・講演数

JpGU 全体の全参加者は 7,968 名、セッション数は 230 件、講演件数は 5,001 件で、AGU とのジョイントミーティングだった昨年よりは少ないですが、通常の大会だった 2016 年以前と比べると大幅に増えています。海洋学会の学協会セッション(共催セッション)は 22 件、これらのセッションへの要旨投稿数は合計 476 件となり、2016 年度までの春季大会の要旨投稿数 400 件前後と比べ

ると投稿数は大きく増加しています(但し海洋以外の分野の投稿も含まれています)。また、学協会セッション以外にも、海洋が関係するセッションは大会全体で 15 件程度ありました。

3. 学会の会合

総会、評議員会、各種委員会も、JpGU 大会時に幕張メッセ国際会議場の会議室で行われました。会議室の使用は有料であるため、経費節約のため複数の委員会を同じ部屋で同時に開催しました。(JpGU 大会に参加登録していない方は「会合名札」を受付で受け取るにより、参加費を払うことなく会合のみ出席することが可能です。)

日 時	会合名
5 月 20 日 12:30-13:30	三賞選考委員会
” 12:30-13:30	論文賞選考委員会
” 12:30-13:30	環境科学賞選考委員会
” 12:30-13:30	沿岸海洋研究会委員会
” 17:15-18:15	沿岸海洋研究会事業部会
” 18:30-19:30	春季評議員会

5月21日	12:30-13:30	Journal of Oceanography 編集委員会
//	12:30-13:30	海の研究編集委員会
//	12:30-13:30	JOS ニュースレター編集委員会
//	17:15-18:15	海洋環境問題研究会
//	18:30-20:30	日本海洋学会 総会
5月22日	12:30-13:30	教育問題研究会

4. フェロー・三宅賞の表彰

2018年度日本地球惑星科学連合フェローに選ばれた光易 恒名誉会員が、他分野の受賞者とともに5月22日 18:30から開催された表彰式で表彰を受けました。おめでとうございます。

2018年度日本地球惑星科学連合フェロー 光易 恒名誉会員
授賞理由：海面波を中心とする海面の力学過程の研究および波浪予測における先駆的かつ顕著な貢献により。

なお、日本海洋学会第5代会長も務められた三宅 泰雄博士のご提案と寄付金で設立された公益信託地球化学研究基金が事業として実施してきました、地球化学研究協会学術賞「三宅賞」は、今年からJpGUに移管されました。正式名称は「日本地球惑星科学連合学術賞(三宅賞)」となり、2年に1回(西暦の偶数年)選考と表彰が行われます(西暦の奇数年は西田賞の選考と表彰)。移管後最初の受賞者は大谷 栄治名誉教授で、今大会の表彰式で表彰されました。

5. 展示

大会では、民間企業や大学、研究機関による一般展示ブース(70ブース)、書籍出版・関連商品の展示ブース(26ブース)、大学の紹介パネル(12枚)、パンフレットスタンド(8カ所)、学協会デスク(13カ所)、special exhibition(6カ所)、および特別カウンター展示(5カ所)が設けられ、様々な分野の多彩な展示が催されました。NASAとJAXAは共同で大画面による衛星観測による最新の研究成果を紹介する「ハイパーウォール展示」を毎年開催しています。

海洋学会も広報委員会のメンバーが中心となって、昨年に引き続き、国際会議場1階のフロアの学協会デスクで学会を紹介する展示を行いました。デスクには入会案内、パンフレット、会場案内図、セッション・会合一覧表、書籍などが置かれました。学会員以外の参加者も多数、海洋学会のデスクに立ち寄りてくれました。

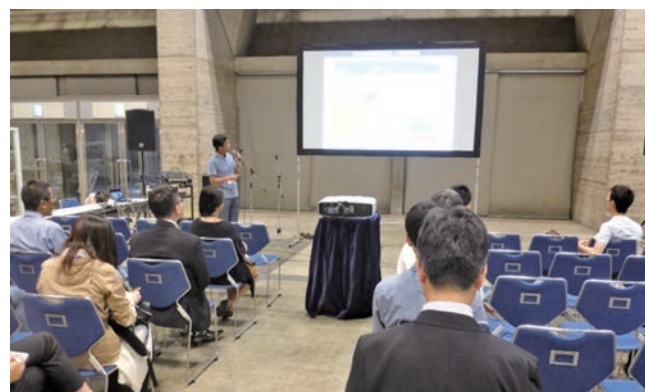


JpGU大会期間中の海洋学会紹介のブース

6. イベント

展示の他にも、JpGU主催で様々なイベントが催されました。西田賞授与の翌年度の大会ではランチタイムスペシャルレクチャーで西田賞受賞者が講演することになっており、5月21日に川合美千代会員の講演が行われました。他にも、表彰式、懇親会、International Mixer Luncheon、学生と若手研究者が語り合う「おしゃべり広(Bar)場」、ショートセミナー、進路・キャリアパス相談など、多くのイベント・企画がありました。

特に、今年度から海洋学会の初めての試みとして、JpGUの参加者に海洋学の魅力を伝えるショートセミナー(各回20分)を3名の学会員に行っていただきました。5月20日に相木 秀則会員「台風襲来時の海洋」、5月21日に菊池 知彦会員「海にいる生命、海にいない生命」、5月22日に本多 牧生会員「海に降る雪：マリンスノー」と、海洋物理、生物、化学の分野から幅広く、最先端の海洋研究を分かりやすく紹介していただきました。高校生から研究者まで各回20名以上の参加者があり、素晴らしいセミナーとなりました。発表者の皆さまに心より感謝を申し上げるとともに、来年度もこのような活動を続けていく予定です。



海洋学会によるショートセミナーの様子(写真の講師は本多会員)

昨年に引き続き、5月20日の19:00からはJpGUフットサル大会「GEOFUT 18」が開催されました。チームで参加することも個人で参加することも可能で、海洋学会の有志もチームを組んで参加しました(末尾の番号編をご覧ください)。人気があったようで、今回は参加申し込みが比較的早い段階で定員に達して締め切られました。来年度以降もぜひ積極的に参加して楽しんで頂ければと思います。

7. 本大会を振り返って

JpGU大会に合流して2回目の春季大会となりました。合流前からJpGU大会に参加して慣れている方も多いせいか、混乱もなく、スムーズに新方式に移行できたように思います。今年はAGUとのジョイントミーティングではなく通常大会に戻ったことや、AOGSやASLO Summer Meetingなど大きな国際学会が6月にいくつか予定されていたせいか、投稿数は期待したよりもやや伸び悩みましたが(展示会場もやや寂しかったような気がします)、それでも2年前までの通常大会よりは大幅に参加者が増えました。AGUとのジョイントミーティングが良い呼び水になったのかもしれませんが、今回も多くの方にご参加いただき、海洋関係のセッションも多数組まれ、盛況な大会となりました。

運営に関してはほとんどJpGUが行いますので、海洋学会の大会実行委員会として行ったことは、セッション提案の呼びかけや、海

洋学会としてのセッション提案、総会・評議員会・各種委員会の準備・開催、学協会デスクでの展示といったものになりました。今回は投稿数がやや伸び悩んだため、口頭コマ数を確保するために、一部の投稿者の方にセッションの移動をお願いすることになりました。お手数をおかけしたことをお詫びするとともに、ご協力に感謝いたします。

なお、昨年までは「学協会セッション」の扱いが曖昧でしたが、今大会から明確化されました。具体的には、セッションを「学協会セッション」にして欲しい提案者は、JpGUの大会サイトでその旨を入力するのではなく、直接、各学協会(のプログラム委員)に申請します。提案締め切り後、「学協会セッション」として認めるセッションを各学協会がJpGU側に報告するという形になります。「学協会セッション」の定義は各学協会にお任せする、ということ(結局曖昧ですね)、海洋学会としては「海洋学会との共催」としております。

広報委員会の皆様には、学協会デスクの設置やショートセミナーの企画・実施をして頂きました。学協会デスクは海洋学会だけテーブルを2つ使い、展示物も他の学協会よりかなり充実していたと思います。今年から新たにスタンプラリーやショートセミナーにも参入し、5月20日、21日、22日にそれぞれ1回ずつの計3回のショートセミナーを行って頂きました広報委員会の皆様、ショートセミナーの講師の方、広報のお手伝いをして頂いた方、どうもありがとうございました。また何かいいアイデアがありましたら幹事会や広報委員会までご一報頂ければと思います。

最後になりましたが、日本海洋学会春季大会が円滑に合同大会に合流できたのは、学会員皆様のご協力とともに、JpGU事務局の方々のご助力によるところも大きく、ここに厚く御礼申し上げます。

8. 来年度の日程

2019年度日本海洋学会春季大会も、JpGU大会にて開催されます。2019年度のJpGU大会の会場は幕張メッセ国際会議場及び東京ベイ幕張ホール、日程は5月26日(日)～30日(木)の予定です。今年は9月3日(日)からセッション提案が開始される予定です。詳細が決まり次第、会員の皆様にご連絡いたします。2019年度大会も積極的なセッション提案をお待ちしております。

番外編報告：西川はつみ(北大低温研)

① JpGU フットサル大会「GEOFUT 18」

日時：5月20日(日) 19:00～22:00

場所：ZOZOPARK HONDA FOOTBALL AREA(JR 海浜幕張駅から徒歩10分)

参加：9名(海洋学会チームとして。他に東大大気海洋研チームとしての参加者多数)

内訳：女3、男6(院生4、社会人5)

形式：参加チームは合計12チーム。人工芝コートでの5対5フットサル。はじめに3ブロックにわかれ予選リーグ3試合(1試合7分)を行い、予選リーグ1-2位が決勝トーナメントに進み、他は各予選リーグ3位同士・4位同士の親善試合(1試合12分)で順位を決定する。女性と40歳以上は得点2倍。

活動内容：海洋学会チームは他のチームに比べて

「得点2倍メンバー」が多かったため、大量得点が期待された。しかし、大学・機関でエントリーしているチームに対してなかなか連携がとれず、得点できない試合が続いた。ただ、守備は堅く、失点は他のチームに比べて少なかった。試合を重ねるごとに徐々に連携がとれ、惜しいシュートも増えたが、結果、予選リーグは無得点で3位(2敗1分)に終り、決勝リーグに進むことはできなかった。

その後、決勝リーグに進めなかったチーム同士での親睦試合が行われた。親睦試合とはいえ、無得点で大会を終えるわけにはいかないので、何とか点を獲ろうと試合に臨んだ。予選リーグよりもさらに連携が強化されシュートチャンスが増えたことで、親睦試合では2点(1点×2人)を獲ることができた。

結果として、海洋学会チームは8位となり、予選リーグで我々が敗れた2チームが優勝・準優勝だった。ただ、この2チームからの失点を抑えられたことから、海洋学会チームの守備力の高さは見せ付けることができたと思う。今回はこの守備力に加えて得点も伸ばし、ぜひ上位を目指したい。

② 海洋学会 フットサル大会

日時：5月22日(火) 19:00～21:00

場所：Z FUTSAL SPORT(JR 南船橋駅から徒歩10分)

参加：22名

内訳：女3、男19(院生9、社会人13)

活動内容：昨年秋に続き、「ガチ」と「ほのぼの」の2グループに分け、7分ゲームを交替で楽しんだ。「ガチ」のゲームでは熱い戦いが繰り広げられ、「ほのぼの」は女性2点ルールが適用され、ほのぼのしながらも点の取り合いで白熱した戦いとなった。交代しながらとはいえ2時間も体力が持つか不安だったが、あっという間に時間が過ぎた。ゲーム終了後には近くのイタリアンで懇親会を行い、親睦を深めた。

海洋学会サッカー(フットサル)大会は一緒に体を動かすことで、分野や研究テーマが異なる人とも、新たなつながりができる場となっていると思う。私はサッカー初心者であるがいつも楽しくプレーでき、普段話す機会のない方とも知り合えるので、毎回この会が待ち遠しい。初心者・経験者に関わらず、今後も多くの方の参加をととても楽しみにしている。



海洋学会フットサル大会の様子



JpGU 2018 (2018年度春季大会)に関するアンケート

庶務幹事 東塚 知己

日本海洋学会 2018 年度春季大会(2018 年 5 月 20 日-5 月 24 日、幕張メッセ)は、日本地球惑星科学連合 (Japan Geoscience Union: JpGU)に合流する形で開催されました。そこで、会員の皆様からご意見を伺うため、2018 年 6 月 4 日(月)-6 月 15 日(金)にウェブ上で『JpGU 2018(2018 年度春季大会)に関するアンケート』を実施したところ、計 50 名の方にご記入いただきました。各設問に対する回答は以下のとおりです。

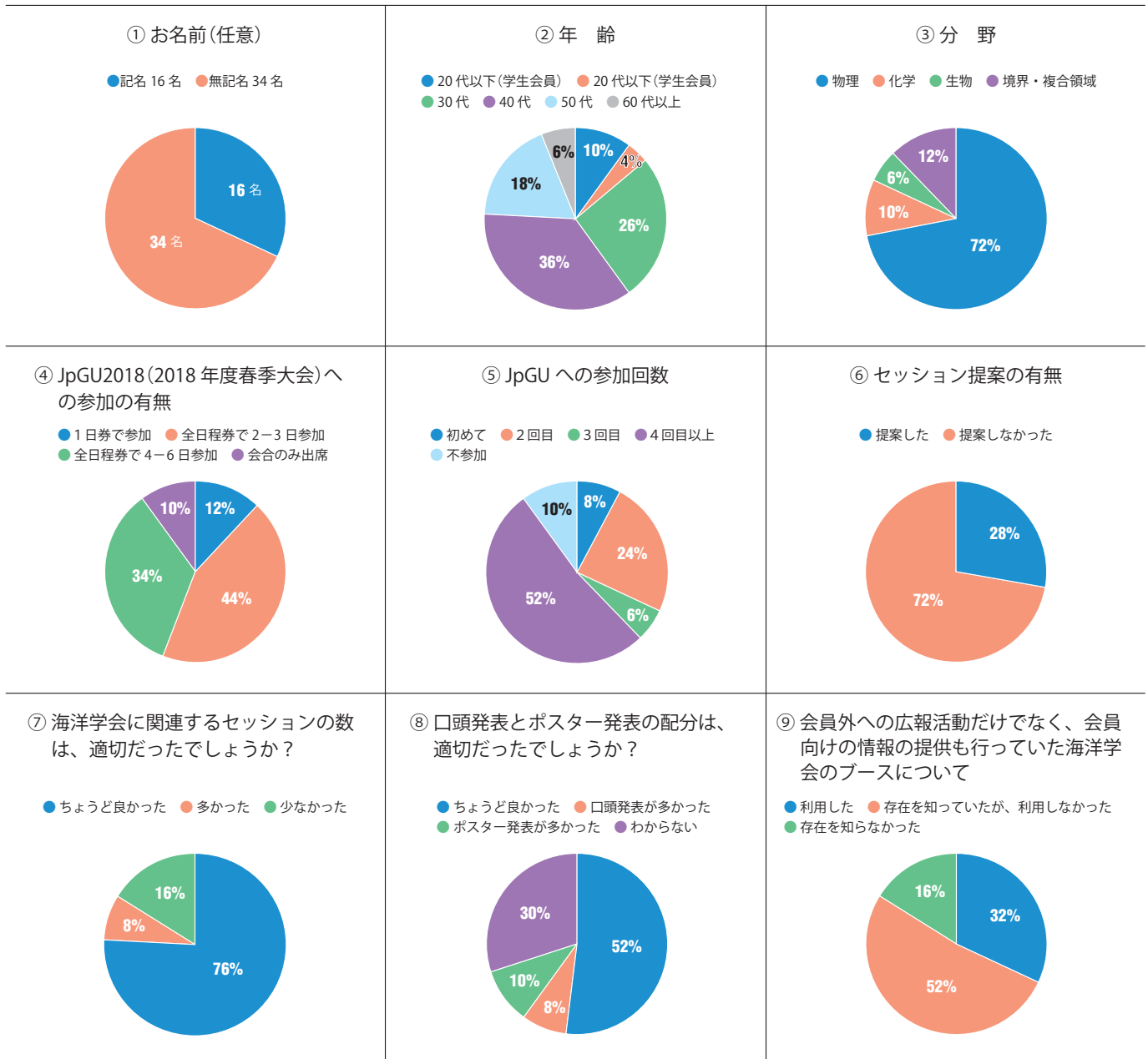
自由回答欄にも多くの貴重な意見が寄せられました。良かった点としては、「他分野との交流の促進」という意見が非常に多くみられました。一方、改善が必要な点としては、「セッションの重複等」、「高い参加費等」、「海洋学会内の交流の減少」、「開催日程・会

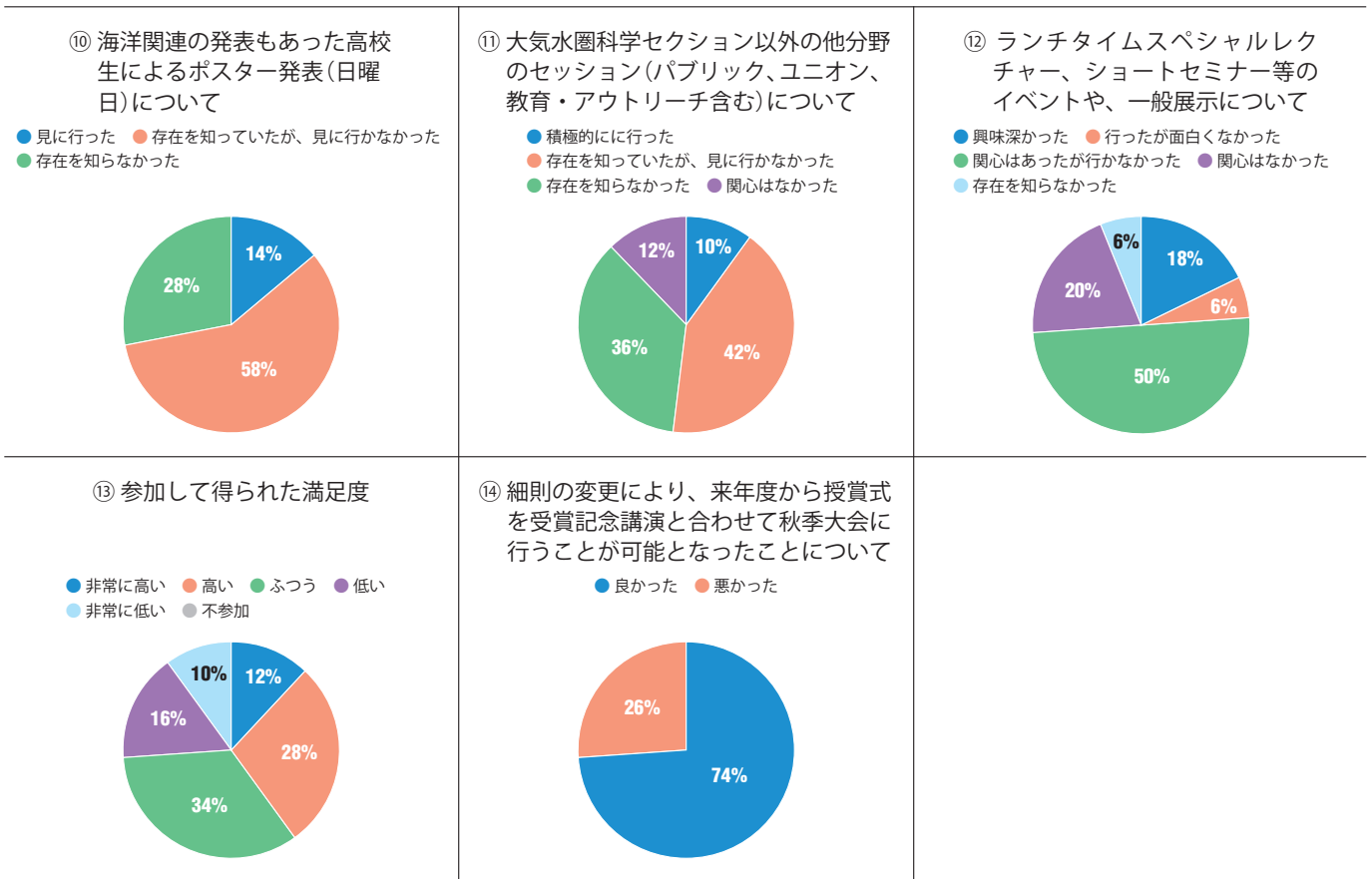
場」等が挙げられていました。本報告記事では、スペースの関係上、残念ながら全てのご意見を紹介することはできませんが、以下の URL よりダウンロードしてご覧になることができます。

http://kaiyo-gakkai.jp/jos/wp-content/uploads/2018/06/questionnaire_2018s.pdf

また、最後の設問にもありますとおり、2019 年度以降は授賞式を受賞記念講演と合わせて秋季大会期間中に行うことになりました。

本アンケートの結果は、春季大会のさらなる充実に向けた議論の貴重な資料になると思います。大変お忙しい中、アンケートにご協力いただいた会員の皆様に心より感謝申し上げます。





学会記事 ③

日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞 受賞候補者の推薦依頼

2019年度日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補者選考委員会 委員長 大島 慶一郎

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補者選考委員会(以下賞候補者選考委員会という)では、これら三賞の2019年度受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けております。下記参考資料をご参照の上、推薦要領に従って、これら三賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただきますよう、お願い申し上げます。なお、宇田賞には、研究グループとしての学術業績ばかりでなく、教育・啓発や研究支援などで海洋学の発展に貢献のあった会員を広くご推薦ください。

各賞候補者の選考にあたりましては、会員の皆様からの推薦と賞候補者選考委員会からの推薦をあわせた中から行うことを申し添えておきます。また、昨年度ご推薦いただいた候補者で、残念ながら受賞されなかった方々についても、改めてご推薦くださいますようお願い申し上げます。

【推薦要領】

以下の項目1-6について、A4版用紙1枚に記入し郵送してください。推薦用紙は日本海洋学会のホームページからもダウンロードできます。

http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards

1. 候補者の氏名と所属機関

(岡田賞の場合は、生年月日も記入してください)

2. 受賞の対象となる研究課題

(宇田賞の場合は、受賞の対象となる学術、教育、あるいは啓発に関する業績)

3. 推薦理由

4. 推薦の対象となる主要論文

(宇田賞の場合は省略可)

5. 推薦者の氏名、印および所属機関

6. 推薦日付

なお、審査の際の参考とするため、学会賞、岡田賞の受賞候補者に関しては、各候補者の略歴と業績リストを、宇田賞については推薦対象課題に関する資料もあわせてお送り頂きますようお願いいたします。またいずれの推薦についても、紙の推薦用紙と資料の送付に加えて、それらの情報を編集可能なマイクロソフト・ワードの電子ファイルとして、以下のメールアドレスに添付ファイルとして、お送りいただきますようお願いいたします。ワードファイルには印影は不要です。

締切日：2018年9月3日(月) 必着

送付先：〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル9階

(株)毎日学術フォーラム内

日本海洋学会賞候補者選考委員会 jos@mynavi.jp

<参考資料>

日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞細則(抄)

第1条 日本海洋学会賞(以下学会賞という)、日本海洋学会岡田賞(以下岡田賞という)および日本海洋学会宇田賞(以下

宇田賞という)を本学会に設ける。学会賞は本学会員の中で海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、岡田賞は受賞の年度の初めに36歳未満の本学会員で、海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、宇田賞は顕著な学術業績を挙げた研究グループのリーダー、教育・啓発や研究支援において功績のあった者など、海洋学の発展に大きく貢献した本学会員の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。(以下省略)



学会記事 ④

日本海洋学会 環境科学賞 受賞候補者の推薦依頼

2019年度 日本海洋学会 環境科学賞受賞候補者選考委員会 委員長 張 勁

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。さて、日本海洋学会環境科学賞受賞候補者選考委員会(以下、賞候補者選考委員会という)では、2019年度環境科学賞の受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けます。環境科学賞の制定の経緯、目的等に関しましては、学会HPに掲載の日本海洋学会環境科学賞「設立趣旨」(http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards)、または「海の研究」第18巻第3号(2009年)、ならびに下記の参考資料(会則)をご参照ください。

なお、受賞候補者の選考は、会員の皆様からの推薦と賞候補者選考委員会からの推薦を併せた中から行うことを申し添えておきます。また、昨年度ご推薦いただいた候補者で、残念ながら受賞されなかった方々についても、改めてご推薦くださいますようお願い申し上げます。加えて、多数の候補者が推薦された場合は、若手研究者を優先いたしますが、本賞は、若手に限らず、海洋環境に関わる活動で高い評価を得ている研究者あるいは研究グループのリーダーを対象としますので、推薦要領に従って、本賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

【推薦要領】

以下の項目について記入し、下記の送付先まで郵送またはメールにてお送りください。

1. 候補者の氏名と所属機関・役職名(生年月日もご記入ください)
2. 受賞の対象となる研究課題
3. 推薦理由
4. 推薦者の氏名、所属機関、メールアドレス
5. 推薦の対象となる主要論文(省略可)
6. 推薦日付

締切日：2018年9月13日(木) 必着

送付先：<郵送> 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル9階

(株)毎日学術フォーラム内

日本海洋学会環境科学賞受賞候補者選考委員会

<メール> 件名を「海洋環境科学賞受賞候補者の推薦」とし、下記宛に送信

jos@mynavi.jp

<参考資料>

日本海洋学会会則 第6章 表彰

第37条 5. 海洋環境保全に関わる学術研究の発展、啓発および教育に大きく貢献した会員を表彰するため、日本海洋学会環境科学賞を設ける。その規定は細則で定める。

現在までの受賞者

2010年度 清野 聡子 / 2011年度 梅澤 有 / 2012年度 速水 祐一 / 2013年度 栗原 晴子 / 2014年度 神田 穂太 / 2015年度 野村 英明 / 2016年度 藤井 直紀 / 2017年度 一見 和彦 / 2018年度 張 勁

Announcement of nomination for the Environmental Science Prize of the Oceanographic Society of Japan

The Oceanographic Society of Japan (JOS) is receiving nominations for the JOS Environmental Science Prize which will be awarded at the 2019 JOS spring meeting to recognize achievements in oceanographic research. Nominees and nominators must be members of JOS.

The JOS Environmental Science Prize is awarded to a member of the Society who has made outstanding contributions to the progress of oceanography and/or educational outreach in the identification, analysis and/or solution of marine environmental problems. One prize is awarded annually.

Recommendations must be written in English or Japanese and should include the followings.

1. The nominee's full name, birth date and affiliation
2. Description of the nominee's achievements for the prize
3. List of nominee's key publications (if available)
4. The nominator's full name, affiliation and email address (signed)

and dated)

Please mail of the recommendation to
Award Committee of JOS Environmental Science Prize
Mainichi Academic Forum, Floor-9, Palace-side Building
1-1-1 Hitotsubashi, Chiyoda-ku, Tokyo 100-0003, Japan
jos@mynavi.jp [Subject: the Environmental Science Prize of JOS]

Deadline: September 13rd, 2018

The winners in the past

2010 Satoko Seino / 2011 Yu Umezawa / 2012 Yuichi Hayami
/ 2013 Haruko Kurihara / 2014 Jyota Kanda / 2015 Hideaki
Nomura / 2016 Naoki Fujii / 2017 Kazuhiko Ichimi / 2018 Jing
Zhang



学会記事 ⑤

2018年度 日本海洋学会 通常総会 議事録

幹事会

日時：2018年5月21日(月) 18:30 - 19:49

会場：幕張メッセ 国際会議場 103

出席者：出席70名、委任状154名、計224名

1. **開会**：北出集会担当幹事より、学会会則第4章第28条の規定による定足数に達しており、総会の成立要件を満たしている旨報告があった。

2. **議長選出**：吉田 次郎会員を議長として選出した。

3. **会長挨拶**：日比谷会長

総会開催に先立って、今年のJpGUフェローに光易 恒会員が選出された件、文部科学省 科学技術分野の文部科学大臣表彰の科学技術賞 開発部門に山本 民治会員が選出された件が報告された。

任期期間中の学会改革として、春季大会をJpGUに合流させたこと、JpGUに日本海洋学会から10名以上の代議員および3名の理事候補者(河宮会員、市川会員、日比谷会長)が選出された件について報告された。3月24日-25日に海洋生物学研究会のシンポジウムが開催され、若手中心に活発な議論が行われた件、秋季大会に各賞授賞式を移行し、受賞記念講演と併せて開催することとなった件、研究発表大会におけるセッション提案制を将来的にリーダーシップのとれる若手会員の育成に活用させたい件について報告された。また財政改革として、2019年1月からのSpringerと新規契約に関して調整し、会計の黒字転換が見込まれることについても報告があった。3月28日に、日本学術会議の地球惑星科学委員会主催で、大型研究計画のヒアリングがあり、マスタープラン2017に提出した課題(深海アルゴフロートの全球展開による気候生態系変動予測の高精度化)を発表した件について報告された。若手海外渡航支援の応募者が最近激減しており、若手研究者との懇談会を通じて生の声を聞き、支援方法について検討していきたい件について報告があった。

4. **報告事項**

1) **会務報告**：2017年度会員異動状況、受賞記念講演座長、各賞授賞式に関する細則の変更、Journal of Oceanography、

「海の研究」、JOSニュースレターの発行状況、2017年度大会の報告および2017年度以降の大会の予告、2018年度各賞受賞候補者の選定結果、各賞候補者選考委員会委員の選挙結果、各委員会・支部・研究会の活動状況などについて報告があった。

2) **学界関連報告**：学界関連情報が紹介された。JpGUおよび水産・海洋科学研究連絡協議会に関する報告がなされた。

5. **審議事項**

1) **2017年度事業報告ならびに決算報告について**：配布資料に基づき説明があった。

2) **2017年度監査報告について**：2017年度の会計処理が適切に行われていたことを確認した旨報告があった。監査報告を踏まえ、2017年度事業報告、決算報告、監査報告が承認された。

3) **2018年度事業計画並びに予算案について**：配布資料に基づき説明があった後、原案が承認された。(秋季大会準備状況について報告があった)

4) **名誉会員について**：山形 俊男会員の推薦がなされ、承認された。

2018年度 日本海洋学会名誉会員授与式・各賞授賞式

日時：2018年5月21日(月) 20:00 - 20:30

会場：幕張メッセ 国際会議場 103

1. **名誉会員**：山形 俊男会員に授与した。

2. **日本海洋学会賞**：永田 俊会員に授与した。

3. **日本海洋学会岡田賞**：浦川 昇吾会員および松野 孝平会員に授与した。

4. **日本海洋学会宇田賞**：青山 道夫会員に授与した。

5. **日本海洋学会日高論文賞**：伊藤 幸彦会員および青山 道夫会員に授与した。

6. **日本海洋学会奨励論文賞**：井手 喜彦会員および菅井 洋太会員に授与した。

7. **日本海洋学会環境科学賞**：張 勤会員に授与した。

8. 宇田賞を受賞した青山 道夫会員より挨拶があった。

9. 環境科学賞を受賞した張 勤会員より挨拶があった。

MXシリーズ水温データロガー



MX2201



MX2203

仕様	HOBOペンダントMX		HOBOティドビットMX	
モデル	MX2201	MX2202	MX2203	MX2204
計測対象	温度	温度・照度	温度	
耐圧(水深)	30m		120m	1,500m
計測範囲(温度)	※-20~50°C(水中), -20~70°C(空气中)		※-20~50°C(水中), -20~70°C(空气中)	
(照度)	-	0~167,000 lux	-	-
メモリー容量	96,000サンプル			
バッテリー	CR2032(交換可)		CR2477(交換可)	CR2477(交換不可)
計測間隔設定	1秒~18時間			
通信方式	BLE(Bluetooth Low Energy) 見越し30m			
寸法(mm)	34×56×16		45×73×36	41×70×35
質量(g)	13		36	33

※バッテリー性能を維持するためには、水中での連続使用温度は30°Cが限度となります。

電気伝導率(塩分)

水位ロガー



電気伝導率(塩分)ロガー

仕様	電気伝導率ロガー
モデル	U24-001
計測範囲(校正) - 導電率	① 0~1,000 μS/cm ② 0~10,000 μS/cm
〃 (〃) - 温度	5~35°C
精度(校正範囲内) - 導電率	読値の3% 又は5 μS/cm(大きい方)
〃 (校正範囲内) - 温度	0.1°C
記録容量(導電率+温度セット)	1範囲指定:18,500 2範囲指定:11,800
最大使用深度/動作温度	70m/0~50°C
寸法/重量	3.18cmφ×16.5cm長/193g
内蔵バッテリー/寿命	3.6V リチウム/3年

MX2001シリーズ	U20シリーズ
4m,9m,30m,76mモデル	
<ul style="list-style-type: none"> ◎ワイヤレス通信 (iOS, アンドロイド端末) ◎気圧補正センサー一体型 ◎標準ステンレスハウジング ◎海水対応チタンハウジング ◎水位単位直読式 ◎ユーザー交換可能バッテリー ◎30,000サンプルメモリー 	<ul style="list-style-type: none"> ◎絶対圧測定式 ◎気圧補正センサー別置 ◎標準ステンレスハウジング ◎海水対応チタンハウジング ◎廉価版ポリプロピレンハウジング ◎専用バッテリー内蔵 ◎21,700サンプルメモリー

姉妹品：気温、湿度、照度、電圧、電流、光量子、日射、風向、風速、土壌水分、気圧、CO₂、その他

製造者 米国オンセット コンピューター社

総代理店 パシコ貿易株式会社

〒113-0021 東京都文京区本駒込6丁目1番21号コロナ社第3ビル
 TEL:03-3946-5621(代) FAX:03-3946-5628
 URL:http://www.pacico.co.jp E-mail:sales@pacico.co.jp

日本海洋学会 2017年度 決算報告

(2017年4月1日～2018年3月31日)

収入の部

単位：円

科目		予算額(A)	決算額(B)	差引額(B)-(A)	摘要
1. 会費収入 2017年4月～2018年2月 (合計金額 13,098,000円)	通常会員会費	15,793,700	19,403,000	3,609,300	* 納入者数 / 2018年2月末の会員数 837/1,251人 納入率 67% 44/70人 納入率 63% 134/142人 納入率 94% 17/20人 納入率 85% 50/54人 納入率 92% 8人
	通常会員会費(シニア)	12,464,100	9,582,000	-2,882,100	
2018年3月 (合計金額 6,305,000円)	学生会員会費	496,800	363,000	-133,800	* 納入者数 / 2018年3月末の会員数 499/1166人 納入率 43% 37/85人 納入率 43% 24/122人 納入率 20% 4/19人 納入率 21% 9/52人 納入率 17%
	賛助会員会費	712,800	833,000	120,200	
	団体会員会費	800,000	720,000	-80,000	
	終身会員会費	1,320,000	1,200,000	-120,000	
		0	400,000	400,000	
		-	5,465,000	5,465,000	
2. 事業収入		2,555,500	2,492,500	-63,000	* NL掲載広告×3件(内1件は2016年度分) * 春季3、秋季4 41件
	広告収入	219,000	351,000	132,000	
	会誌売上収入	772,000	817,000	45,000	
	刊行物売上収入	24,500	24,500	0	
	JO掲載料	1,540,000	1,300,000	-240,000	
3. 積立金		823,000	348,416	-474,584	宇野木基金より
	環境科学研究助成	823,000	348,416	-474,584	
4. 雑収入		1,003,000	1,139,258	136,258	
	受入利息	3,000	3,392	392	
	著作権料	1,000,000	965,866	-34,134	* springer印税68万、JST12万、JAC28万
	その他	0	170,000	170,000	* 若手助成残金戻り1件、渡航援助辞退1件
5. 寄附金		300,000	1,748,754	1,448,754	
	日本海洋科学振興財団	200,000	200,000	0	
	海口マン21	100,000	100,000	0	
	大会開催戻り金	0	1,448,754	1,448,754	* 2017年秋季
6. 学会基本金から一時繰入		0	0	0	
小計		20,475,200	25,131,928	4,656,728	
前期繰越金		11,677,300	11,677,300	0	
合計		32,152,500	36,809,228	4,656,728	

支出の部

単位：円

科目		予算額(A)	決算額(B)	差引額(B)-(A)	摘要
1. 管理費		10,060,000	9,225,713	-834,287	* 2017年4月～2018年3月
	業務委託費	7,340,000	7,077,731	-262,269	
	会議費	510,000	412,424	-97,576	
	旅費交通費	650,000	495,123	-154,877	
	通信運搬費	400,000	377,745	-22,255	
	消耗品費	460,000	460,457	457	* コピー代、封筒制作費等
	雑費	700,000	402,233	-297,767	
2. 事業費		13,966,200	12,939,507	-1,026,693	
	大会開催費	1,000,000	1,000,000	0	
	海洋環境問題研究会	100,000	100,000	0	
	海洋生物学研究会	100,000	100,000	0	
	教育問題研究会	100,000	100,000	0	
	女子中高生夏の学校経費	50,000	4,854	-45,146	
	JO発行経費	6,267,200	6,266,444	-756	* 6回分、編集委員会費を含む
	海の研究発行経費	1,590,000	1,202,321	-387,679	* 6回分、編集委員会費を含む
	JOSニュースレター発行経費	1,480,000	1,478,968	-1,032	* 4回分
	広報委員会	150,000	150,000	0	
	会誌送料	800,000	809,756	9,756	
	会員名簿発行費	150,000	125,172	-24,828	* 会員名簿制作費
	送金手数料	70,000	65,016	-4,984	
	学会賞金	800,000	800,000	0	
	メダル製作費	10,000	6,976	-3,024	* 名前印字
	若手集会助成金	300,000	300,000	0	* 2件
	若手研究者海外渡航援助	300,000	140,000	-160,000	* 1名
	青い海助成事業	600,000	200,000	-400,000	* 1件
	日本地球惑星科学連合会費	10,000	10,000	0	
	日本地球惑星科学連合会寄付金	9,000	0	-9,000	
	地学オリンピック協賛金	50,000	50,000	0	
	防災学術連携体会費	30,000	30,000	0	
3. 予備費		8,126,300	0	-8,126,300	
小計		32,152,500	22,165,220	-9,987,280	
次期繰越金		0	14,644,008	14,644,008	
合計		32,152,500	36,809,228	4,656,728	

日本海洋学会 2018年度 予算

(2018年4月1日～2019年3月31日)

一般会計

収入の部

単位：円

科 目	2017年度 予算額(A)	2018年度 予算額(B)	差引増減額 (B)-(A)	備 考
1. 会費収入	15,793,700	15,056,200	-737,500	
通常会員会費	12,464,100	11,939,400	-524,700	年会費 11,000 会員 1,206名 納入率 90%
通常会員会費(シニア)	496,800	633,600	136,800	年会費 8,000 会員 88名 納入率 90%
学生会員会費	712,800	475,200	-237,600	年会費 6,000 会員 88名 納入率 90%
賛助会員会費	800,000	760,000	-40,000	年会費 40,000 会員 19名 納入率 100%
団体会員会費	1,320,000	1,248,000	-72,000	年会費 24,000 会員 52名 納入率 100%
2. 事業収入	2,555,500	2,615,500	60,000	
広告収入	219,000	519,000	300,000	NL4回：2社、名簿6社
会誌売上収入	772,000	772,000	0	JO 20,000×13 = 260,000 海の研究 9,000×18 = 162,000 セット 25,000×14 = 350,000
刊行物売上収入	24,500	24,500	0	要旨集 3,500×7 = 24,500
JO掲載料	1,540,000	1,300,000	-240,000	
3. 積立金	823,000	823,000	0	
環境科学研究助成	823,000	823,000	0	積立金より(助成金3件60万、環境科学賞副賞10万、委員会費含む)
4. 雑収入	1,003,000	1,003,000	0	
受入利息	3,000	3,000	0	学会基本金等利息
著作権料	1,000,000	1,000,000	0	Springer 印税含む(60万)
5. 寄付金	300,000	300,000	0	
寄付金	300,000	300,000	0	海ロマン 21 100,000 日本海洋科学振興財団 200,000
小 計	20,475,200	19,797,700	-677,500	
6. 前期繰越金	11,677,300	14,644,008	2,966,708	
合 計	32,152,500	34,441,708	2,289,208	

支出の部

単位：円

科 目	2017年度 予算額(A)	2018年度 予算額(B)	差引増減額 (B)-(A)	備 考
1. 管理費	10,060,000	9,600,000	-460,000	
業務委託費	7,340,000	7,340,000	0	
会議費	510,000	450,000	-60,000	評議員会、賞委員会他
旅費交通費	650,000	600,000	-50,000	諸会合旅費
通信運搬費	400,000	400,000	0	通常郵便料、ML維持費
消耗品費	460,000	460,000	0	コピー、封筒他
雑費	700,000	350,000	-350,000	会費およびJO掲載料クレジットカード入金手数料等
2. 事業費	13,966,200	14,678,000	711,800	
大会開催費	1,000,000	1,000,000	0	2018年度秋開催
海洋環境問題研究会	100,000	100,000	0	
教育問題研究会	100,000	100,000	0	
海洋生物学研究会	100,000	100,000	0	
女子中高生夏の学校経費	50,000	50,000	0	
JO発行経費	6,267,200	6,386,000	118,800	発行費5冊分、冊子体130部購入費
海の研究発行経費	1,590,000	1,400,000	-190,000	
J-STAGE公開経費	0	100,000	100,000	海の研究
JOSニュースレター発行経費	1,480,000	1,480,000	0	4回分
広報経費	150,000	150,000	0	
会誌送料	800,000	800,000	0	団体・賛助等年6回、その他会員NL発送年4回
会員名簿発行費	150,000	832,000	682,000	名簿作成費(情報更新ハガキ通知費含む)
送金手数料	70,000	70,000	0	
学会賞金	800,000	800,000	0	
メダル製作費	10,000	10,000	0	受賞者名刻印
若手集会助成金	300,000	300,000	0	
若手研究者海外渡航援助	300,000	300,000	0	
青い海助成事業	600,000	600,000	0	3件
日本地球惑星科学連合会費	10,000	10,000	0	
日本地球惑星科学連合会寄付金	9,000	0	-9,000	
地学オリンピック協賛金	50,000	50,000	0	
防災学術連携体年会費	30,000	30,000	0	
男女共同学協会連絡会分担金	0	10,000	10,000	
小 計	24,026,200	24,278,000	251,800	
3. 予備費	8,126,300	10,163,708	2,037,408	
合 計	32,152,500	34,441,708	2,289,208	

アカデミア メランコリア (第19回) (若手のコラム)

国立環境研究所 日本学術振興会特別研究員 PD 土屋 健司

国立環境研究所 地域環境研究センター 湖沼・河川環境研究室の土屋 健司と申します。私は宮崎 駿監督の映画「崖の上のポニョ」のモデルと言われる鞆の浦を有する広島県福山市の出身です。新幹線のぞみが1時間に1本福山駅に停まるのが自慢です。この度は広島大学の小原さんより“広島繋がり”で若手コラムの執筆者としてご指名いただきました。



2014年3月、創価大学で学位を取得後(指導教官 戸田 龍樹教授)、助教として3年間大学に勤めました。博士課程から助教時代にかけて、縁あって国環研の湖沼・河川環境研究室前室長である今井 章雄先生と「放射性同位体を使用しないバクテリア生産速度測定法」の開発を共に行ってきました。そして助教の任期が切れる2017年4月より、今の研究室の現室長である高津 文人先生に受け入れていただきました。

現在、海では溶存態有機物の分子量分布とバクテリアによる利用特性を調べています。相模湾を主なフィールドとしていますが、5月末には北海道大学鈴木 光次先生の新青丸航海KS-18-6に参加させていただき、三陸沖において溶存態有機物の光分解特性とバクテリア生産の関係を調査してきました。陸水では、霞ヶ浦を主なフィールドとして、メタン由来炭素の湖沼食物網における重要性の評価ということを軸に研究を進めており、そのほかには琵琶湖でバクテリア動態などを調べています。

昨年初めて日本陸水学会(9月28日-10月1日)に参加してみました。昨年はかなり特殊な開催形態で、秋田県田沢湖のホテルを貸し切って、合宿形式で行うというものでした。しかも、一人で参加する場合(もしくは相部屋希望者を申告しない場合は、初めて会う人と相部屋ということもあり、寝ても覚めても陸水学会まみれという感じでした。しかも、周囲には居酒屋などないため、夜は基本的にはホテル内のどこかしこで集まり、飲んだり話したりという感じです。ここの若手の会はまたとても濃く、ホテル内の昼の小宴会場を貸し切り、ライトニングトークで簡単に自己紹介を行い、みんなで議論するというものでした。片手にはお酒。延々と夜遅くまで皆でしゃべり、初めて参加する私もその輪の中に自然と入れてくださり、とても良くしていただきました。また、もはや若手ではない(?)先生方も乱入し、若手とともに楽しくお酒を飲みながら議論する姿に、先生方もこの若手の会で触発しあいながら育ち、この会を大切にされているんだろうなと感じました。

とりとめのない話になってしまいましたが、海洋学会は私を育てていただいた大恩ある学会ですので、海の研究を続けられる限り、ともに歩んでいきたいと思っております。今後とも何卒よろしくお願い致します。

JOS News Letter

JOS ニュースレター
第8巻 第2号 2018年8月1日発行

編集 JOSNL 編集委員会

委員長 安藤健太郎 委員 根田昌典、田中祐志、張 勁

〒237-0061 神奈川県横須賀市夏島町2-15

国立研究開発法人海洋研究開発機構

電話/FAX 046-867-9462

メール andouk@jamstec.go.jp

デザイン・印制 株式会社スマッシュ

〒162-0042 東京都新宿区早稲田町68

西川徹ビル1F

http://www.smash-web.jp

発行

 日本海洋学会
The Oceanographic Society of Japan

日本海洋学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル9F

(株)毎日学術フォーラム内

電話 03-6267-4550 FAX 03-6267-4555

メール jos@mynavi.jp

※今号の表紙の写真は、2017年12月インド洋上の「みらい」の観測風景 (JAMSTEC 提供、堀井孝憲会員撮影)、記事タイトル横の写真は、北西太平洋で撮影された剛クラゲ目 (JAMSTEC 提供) および日本海で撮影されたガンギエイ科 (JAMSTEC/NHK 提供) です。会員からの写真を随時募集しています。